

逃げ足 (第2話)

・現役時代、逃げ足を鍛えられた旅の思い出

黒人に追われたパリの裏道

出張先の夜は、気の置けない仲間が一緒の時はつい繁華街へ足が向く。

三人の仲間とムーランルージュの周りをそぞろ歩いた帰り、宿泊先のホテルまでは近道といっても未だ相当の距離ある裏道に入って間もなく、誰かに着けられている？と直感し、一瞬振り向いた後ろに大柄の黒人が二、三人。

それからは振り返らずに歩を早めた。すると、はつきりと足音が迫って来たのを感じて、これは危険！と一斉に走った。無我夢中で逃げた。後ろとの距離を確認する余裕など無い。大通りに出た。ホテルは近い。それでもまだ追ってくる。

三人ともホテルに駆け込んだ。助かった！

どの位の距離を追われたのか？どの位の時間が経過したのか？僕は、何ら覚えが無い程の怖さを味わった。

同行した仲間は、海外の夜の街は慣れていたようだったが、武闘の心得までは無いとみえ、さすが今夜は慌てたようだ。

出張といっても、海外進出を念頭にした異業種の一行による視察旅行で、僕は健康事業を課題に参加、フランスのタラソテラピ―（海洋療法）やドイツの温泉療法の視察を目的にしていたが、視察とは別に、異業種の人達との寝食を共にした交流は殊のほか濃いものであった。

ミラノでは捕獲された

街なかの舗道は、一見綺麗だが少々歩き難い。

下ばかり気になって歩いてしたが、何メートルか先の方から横

一列になったような姿が近づいて来た。

少し、脇によけようとしたところ、一気にすーっと忍び寄られて取り囲まれ、あつという間に、僕の上着の内ポケットやズボンの中、至るところに数人の手、十数本が入ってまさぐって来た。ぞっと総毛立った。何をされているのか恐怖で声も出ない。

気付いたら、その連中はクモの子を散らすように逃げたのだから、僕はその場にただ独り茫然と立ち尽くすばかりだった。

それからである、懐からズボンの中まであらためたのは。

幸いなことに、あらかじめ別行動の仲間から教わった用心が見事に生きていた。忠告通り、パスポートはホテルの金庫の中、お金は靴下の内側に仕舞い込んでいたのである。またこの日もスケッチブックを小脇にしていたが、それも無事で良かった。

（貴重品を守る方法、もっと賢明な方法あるんでしょうね？）

チンピラに追われて逃げ回った小倉の夜

当時小倉市と呼ばれた、現在の北九州市小倉地区。その小倉にある不動産会社からの依頼で、研修講師を二週間ほど東京から出張して務めたことがあった。研修の最終日、役員から礼を云われた後、打ち上げということで、会社の研修担当課長に誘われて飲みに行った。

その帰り二人でタクシーから降りるとき、「おつりは要らないです」と云ったところ、

何が勘に触ったのか？

突然、運転席から顔を出して、大声で車外の仲間と思しき連中を呼び寄せているような不穏な空気。慌ててタクシーのドアを開けるや、僕らは無我夢中で逃げ出す羽目となった。

お互いのことは全く気にする余裕などない、とに角自分の身が

逃げおおせるか、一目散で逃げた。不案内の土地のどこをどう走ったのか、交番はおろか逃げ込む先の当てがない。

気が付いたら、僕は研修期間中頻繁に通ったバーのカウンターの中に身を伏せていた。多分、「ママ、追われている！この中に隠れさせて！」とお願ひしたのだろう。

翌日、気になっていた研修課長はどうだったのか？その会社に電話すると、休みを取ったという。教えてもらった電話番号先で、絶え絶えの声。すぐ駆けつけた。

そこに、眼もふさがる腫れあがった酷い顔の課長が居た。僕はすぐさま馬肉を買って来た。そして一日中手当てする羽目となったのだった。

それにしても、何が気に食わなかったのか？

僕の東京弁の「おつりは要らないです」が、成り上がったような生意気な若造の態度に思えたのか、よく解からない。

番外編

家族で北海道旅行、エゾシカをヒグマと間違え、家族の先陣を切って大脱走！

それは、バードウォッチングを兼ねた家族四人（長女は別途旅行中）の道東・釧路湿原の旅だった。人家など全くない森の中、距離百メートル以上はあったと思う、そこに巨大な動物の影を見た！直感で、ヒグマと思った。家族に逃げよう！と、皆を引っ張る格好で、先頭になって走り出した。それも、常に先頭で。

相当走ったところで、ヒグマでなく角を頭に載せたエゾシカを双眼鏡の中に確認、後ろの家族に、大丈夫！と伝えたのだが・・・

後のち、「父さんは、家族を置いて、自分だけ逃げようとした」と、何かにつけ挪揄されるはめになった。